

主題	入居者急変時における職員不安の軽減
副題	心肺停止状態に不安なく対応する為に

急変時の不安軽減	介護スキル向上
----------	---------

研究期間	51ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 神明園
------	------	-----	---------------

発表者：氏家 進（うじいえ すすむ）	アドバイザー：中村 正人（なかむら まさと）
--------------------	------------------------

共同研究者：

電 話	042-579-2711	メール	info@sinmeien.or.jp
FAX	042-579-6868	URL	http://www.sinmeien.or.jp/

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	東京の西部に位置する羽村市、（人口約5万7千人）に、市内3番目の特養として平成11年に開設し、今年で15年が経過しました。『楽しみ』『くらし』～そして『よるこび』を理念に掲げ、全員参加による生活援助の実践を目指しています。 日々の様子はこちらでもご確認ください。 →https://www.facebook.com/sinmeien
------------------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

入居者の急変時対応への不安は、多くの介護職員が抱えている問題である。特に対応できる職員も少なく、看護師が不在となる特養の夜勤帯における不安は大きい。そこで、神明園では心肺停止状態に遭遇した時の不安軽減の為、介護業務にあたる正職員全員に上級救命講習受講を課している。しかし、心肺蘇生法（以下 CPR）は講習を受けただけで身に付くものではない。その確実性を向上させるには、継続的な訓練を施す事が望ましいが、機会や機材が無ければ、不安を抱えたまま CPR を実践する場に立ち会う事になり、恐怖や不安によりせっかくの技術を発揮できない、といったことが課題となっていた。

そこで、平成21年4月より、防災委員会が中心となり、上級救命講習修了者を対象に CPR 及び自動体外式除細動器（以下 AED）の使用に関するフォロー訓練を開始した。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

【目標】

職員が心肺停止状態の人間を目の当たりにした時、躊躇なく適切な心肺蘇生術を施す事ができるようになる。

【目的】

職員が抱える、自分がやらなければならない、という緊迫状況での不安と恐怖を軽減する。

【期待される成果】

- ・訓練を重ねる事で CPR や AED へ触れる機会が多くなり、苦手や不安等の軽減が図れる。
- ・夜間看護師不在時における、速やかな急変対応体制の盤石化をなす。
- ・医療職へつなぐ確実な橋渡しが確立できる。
- ・模擬訓練を通し、正確な動作が困難な状況下においてもスムーズに行えるか試すなど、困難さを付加することで急変対応スキルが向上する。
- ・救命に対し、組織的かつ積極的な取り組みを公開する事で、家族への安心感向上が図れる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

OCPR 実践強化へ向けて

適切な圧迫強度、拍子を体感的に覚えられるよう、練習用ダミー人形を施設で購入した。模擬的かつ実践的な訓練を、いつでも可能とする環境を整え、正確な技術と知識を習得する機会を設けた。防災委員会主催による集中訓練は年間3回（地域合同訓練含む）実施し、訓練期間は全員が基準値へ到達するまでとし3週間を目安に実施している。

OAED を適切かつ躊躇なく使えるスキルの獲得

某警備会社との契約により、AED を常設している。訓練時には AED トレーナーを使用するが、これは必要時に消防署や警備会社からレンタルを受ける事ができている。

○上級救命講習有効期限の確認

有効期限の管理を個人単位で行う事は失行のリスクが高いとの理由から、防災委員会委員会にて毎月確認することでフォローする。

《4. 取り組みの結果と考察》

これまでの資格取得後のフォロー訓練実践を振り返り、アンケートにて不安軽減の傾向を調査した。結果、不安軽減が出来ていると回答した職員が約75%、残り約25%については未だ不安を抱えたままの状況が確認された。25%の該当者のうち、約60%は、介護職員としての就業経験が浅い女性職員に多いことがわかった。

この結果から不安の強い職員へのフォローの一つとして、夜勤の職員の組み合わせに CPR スキルの習熟度を考慮する対策を即時導入し、現在不安軽減に努めており、一定の効果を得られている。過去の離職者の退職理由には夜勤における急変時への不安があげられることもあったが、訓練を取り入れた事によりその理由での退職は減ることが期待される。

今後さらなる CPR 習熟の均一化を図る為には、急変対応直後の不安についても聴取を行い、不安を訴えた職員に関して縦断的に実践結果の確認をフォローしてゆく必要がある。

《5. まとめ、結論》

心肺停止状態に遭遇した時の、対応不安軽減のために実践してきた訓練である。それは着実な効果を感じられるものとなった。適切な心肺蘇生術を施し、より確実に救急隊や医療職への橋渡し強化出来てきていることは確実な成果と言える。

なお、訓練の様子は SNS (social networking service) を通じて公開もしてきた。家族の安心感向上への寄与を期待したこの動向は、今後聞き取りなどで確認の必要を有しており、今後の課題とする。

余談であるが、練習用ダミー人形の購入は、その使用頻度と訓練効果から、対費用効果の非常に高いものとなった事を付け加えておく。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本発表を行うにあたり実施した職員アンケートは、神明園園長の許可のもと実施している。アンケート結果については、発表者のみの確認とし就業上の不利益を回避している。

《7. 参考文献》

- 1) 身に付けよう応急手当 上級救命講習テキスト 東京救急協会著 2005
- 2) 身につけよう応急手当 応急手当普及員講習テキスト 東京消防庁、東京防災救急協会著 2010

《8. 提案と発信》

実際に心肺停止時の対応を行う上で、上級救命講習の受講は有意義である。そこに加えて、職員の就業上の不安軽減で行ってきた訓練であるが、地域社会との関わりや連携強化を図る材料としての応用を考え、地域住民へ向けた心肺蘇生術のフィードバックの実践も開始した。しかし、本件のような取り組みは施設の収益に直結せず、訓練効果を向上させる資材、機材の購入に対する資金は施設負担で賄われる。多くの介護職の就業不安軽減に貢献する可能性を示唆したこの環境整備は、法の下整備頂きたいと切望する。

【メモ欄】